

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19300286

研究課題名(和文) 国際文化探究学習のためのコミュニケーション・マネジメント・システムの研究

研究課題名(英文) A study of communication management system for international cultural inquiry-based learning.

研究代表者

坂本 旬 (SAKAMOTO JUN)

法政大学・キャリアデザイン学部・教授

研究者番号：60287836

研究成果の概要(和文)：

本研究の成果は、(1)「NetCommons」による文化探究学習の有効性を検証し、(2)文化探究学習理論を活用した「異文化理解」に国連やユネスコによる「メディア情報リテラシー教育」に関する最新理論を融合した教材の作成とその実践を行ないつつ、(3)日本及びアメリカ、カンボジア、中国の初等・中等・高等教育レベルの学校・大学とのICTを活用した協働的な文化交流学習の有効性を実証したことである。本研究の総括として、国際シンポジウム「文化葛藤時代のメディア・リテラシー教育—国連『文明の同盟』と日本の実践・課題」を開催した。

研究成果の概要(英文)：

The results of this study are: (1) to have determined the effectiveness of international cultural inquiry-based learning by using the "NetCommons"; (2) to have created teaching material that united "intercultural understanding," applying the theory of international cultural inquiry-based learning with the latest theory of "media information literacy education" developed and used by UN and UNESCO; and (3) to have proven the effectiveness of ICT supported collaborative inter-cultural exchange program in Japan, the United States, Cambodia and China's primary and middle schools, and universities. International symposium "Media Literacy Education in Cultural Conflict Age - Practice and Challenges of the United Nations 'Alliance of the Civilization' and Japan" was held in the final fiscal year.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2009年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
総計	14,100,000	4,230,000	18,330,000

研究分野：教育工学

科研費の分科・細目：教育工学

キーワード：協働学習 国際交流 国際理解教育 ICT教育 文化探究学習 異文化理解 メディア・リテラシー 情報リテラシー

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、中核となるサーバーの構築に国立情報学研究所が開発を進めている「NetCommons」を採用し、小学校英語や外国語教育での実践の可能性も視野に入れつつ、文化探究学習プログラムをアジア諸国へ展開させることをめざしたものである。

文化探究学習（カルチャー・クエスト）とは、2002年にニューヨーク市立大学学校開発センター（研究協力者シャピロウ、研究協力者ガーシュ、HP: <http://www.culturequest.us/>）が開発した学習プログラムであり、子どもたちの情報リテラシーの育成をはかりながら、インターネットを活用して学校・学級間の国際交流と文化探究学習の普及をめざしている。

これまで探究学習といえば、降旗勝信（1974年）が明らかにしたように、教授＝学習過程に科学の方法を導入し、探究能力や科学的概念、望ましい態度の形成を目指すものであり、発見学習とほぼ同義であった。しかし、ICTが教育に活用されるようになり、情報の共有化や「学びの共同体」を通じた新しい探究学習のモデルが登場しつつある。同時に、探究学習をささえる21世紀型基礎学力としての「情報リテラシー」能力の形成が重視されるようになり、日本でも1998年にアメリカ学校図書館協会が作成した「情報リテラシー基準」が紹介されるにいたった。

ニューヨーク市立大学が開発した文化探究学習プログラムは、このような学習モデルを文化学習に応用したものであり、グローバル化時代の文化的アイデンティティと異文化理解能力の形成をめざしたものである。すでに、アメリカ各地をはじめ、日本、インド、スウェーデンなど世界各地で実践され、ビデオ会議システムを活用しながら国際的な実践交流が積み重ねられている。

前回の科研費研究では、平成16年度に文化探究学習のためのサイトを設置し、国際文化交流のための翻訳システムを導入した。同時に日英および日中相互翻訳システムを用い、大学の授業での活用法を検証し、17年度では日本とアメリカの大学・小学校間の交流に活用する方法を実践的に研究した。

具体的には、東京都墨田区立押上小学校（研究協力者高木）とニューヨーク市立モットホール小学校および第116市立小学校との交流を行った。まず、各小学校で文化探究学習に取り組み、調べた成果をホームページとして発信し、インターネットを活用して作品についての意見交換を行った。また、法政大学で情報教育を学ぶ学生たちが、大学からの助成金を得て、文化探究学習の一環として押上小学校の児童の作品やメッセージをニュ

ーヨーク市のこれらの学校で紹介する模擬授業を行った。

このような研究の過程で、私たちは国立情報学研究所の新井（研究協力者）が開発した「XOOPS」ベースの「NetCommons」が国際的コミュニケーションのツールとして有効であることを見だし、平成18年7月より、法政大学図書館司書課程のサーバー（研究協力者菅原が管理）を借りて実験的な検証に着手した。

このように、本研究は、文化探究学習と国際交流教育、および情報教育という3つの教育研究領域を同時に内包するものである。

## 2. 研究の目的

### (1) 「NetCommons」による文化探究学習の有効性の実証

「NetCommons」を開発している研究協力者新井（国立情報学研究所）と共同して「NetCommons」に自動翻訳モジュールなどの機能を付加するなどの改良を行い、コミュニケーションウェアとして活用することにより、国際的な情報共有と探究型文化学習を中心とした協調学習の有効性を実践的に検証する。

### (2) アジア諸国との共同的文化交流学習の有効性の実証

欧米を中心とした英語圏だけではなく、中国や韓国、東南アジア、インドなどのアジア諸国と共同で「文化探究学習」プログラムを実施することにより、各国の児童・生徒により深い相互理解と文化的アイデンティティの形成の可能性を実践的に検証する。

### (3) 文化探究学習を活用した「異文化理解」や「外国語教育」のカリキュラム・教材開発

これまでに開発・実践されてきた文化探究学習の成果を土台に、文化探究学習のネットワークを小・中・高、大学と幅広く活用してもらうため、異文化理解やコミュニケーション教育、外国語教育などの科目で利用可能なカリキュラム・教材の開発を行う。

## 3. 研究の方法

### (1) 「NetCommons」による文化探究学習の有効性の検証

- ①「文化探究学習」専用サーバーの構築と「NetCommons」システムの検証
- ②「NetCommons」に自動翻訳機能を組み込むためのモジュールの開発（英語・中国語）
- ③ビデオ会議システムの利用方法の研究
- ④児童生徒学生の作品のデータベース化

## (2) 欧米・アジア諸国との共同的な文化交流学習の有効性の検証

- ①文化探究学習プロジェクト参加校(アメリカ・中国・インド)の募集と発掘
- ②海外の「文化探究学習」実践校の現地調査
- ③海外の「文化探究学習」実践校との交流実践

## (3) 「異文化理解」や「外国語教育」のカリキュラム・教材開発

- ①「文化探究学習」を活用した異文化理解やコミュニケーション教育、外国語教育のカリキュラム・教材開発(初等・中等・高等教育レベル)
- ②モデル校を中心とした「文化探究学習」プログラムを実践するための教員研修

## 4. 研究成果

本研究成果のもっとも大きな特徴は、「NetCommons」等の ICT 活用研究だけではなく、学校図書館を中核とした情報リテラシー教育研究から、国連「文明の同盟」やユネスコによるメディア情報リテラシー教育研究へと最新の理論の導入を行ってきたことである。

これにより、初期の「調べ学習」を中心とした文化探究学習の形態から、メディアを活用した異文化理解を取り入れた文化探究学習の形態をモデル化するにいたっている。この学習理論と実践成果は、全米メディア・リテラシー教育協会(NAMLE) (2011年) やユネスコ・メディア情報リテラシーと文化対話(MILID) (2012年) で報告を行っている。

最終年度は 東日本大震災のため、前年度やむなく中止となった国際シンポジウム「文化葛藤時代のメディア・リテラシー教育—国連『文明の同盟』と日本の実践・課題」を開催した。本シンポジウムでは、国連「文明の同盟」メディア・リテラシー教育プロジェクト・マネージャージョルディ・トレント氏にメディア情報リテラシー教育の意義と現状について報告いただいた。同時に坂本による本研究成果の報告及び日本でメディア・リテラシー教育を進めているメル・プラッツ、FCTメディア・リテラシー研究所、国語メディア研究会の報告とディスカッションを行った。

このシンポジウムの記録および本研究の成果は 24 年度中に報告書としてまとめ、公表する予定である。

主な研究成果は、以下のとおりである。

- (1) 「NetCommons」による「文化探究学習」専用サーバーの構築を行った。
- (2) 同じサーバー内に文化探究学習教材のデータベース用の領域を確保し、アップロード・検索・閲覧用のWebページを作成した。

(3) 「NetCommons」に自動翻訳機能を組み込むためのモジュールの開発を行い、大学の授業を通じて実証的な検証と評価を行った。

(4) 国際ビデオ会議・交流システムの利用方法の研究。ビデオ会議システムとしては世界的に汎用性のあるスカイプを活用した。また、小学生向けの協働システムとしてNOTAを採用して実践を行った。

(5) 文化探究学習プロジェクト参加校の発掘(アメリカ、カンボジア、ベトナム、中国)を行い、プロジェクトを協働で実践した。これまでの海外の参加校は以下のとおり：アメリカ・テキサス大学ダラス校、カンサス州・ハスケル大学、ベトナム・ベトナム国立ホーチミン社会科学人文大学、カンボジア・メコン大学、台湾・崑山科技大学、ベトナム・レクイドン高校・村山記念 J V P F 日本語学、カンボジア・職業開発訓練機構 (V. D. T. O) 、中国大連市第十六中学校など。

(6) 日本側の協力校として江戸川区立鹿骨東小学校5年の3クラスを選び、9月以降VDT小学校とスカイプを使った国際文化交流授業およびカンボジアを教材にしたメディア・リテラシーの授業とVDT0小学校に向けたビデオレター制作を行った。(2009~2011年)

(7) 法政大学とメコン大学の学生の協働によるVDT0小学校を舞台としたドキュメンタリービデオ作品を制作した。(2010~2011年)

(8) 法政大学附属第二中学校と中国大連市立第十六中等学校との間で、ビデオレター制作と交換を通じた異文化理解学習を行った。(2011年)

(9) 江戸川区立鹿骨東小学校との「総合的学習の時間」を活用した2年間の教育実践をもとに、カンボジア(2010) や大連(2010-12) で教員研修及び授業実践を行なった。

(10) カリキュラム開発・教材開発鹿骨東小学校との「総合的学習の時間」を活用した2年間の実践をもとに、引続きカリキュラムの開発を行っている。これまでの教育実践をもとに、カンボジアや大連では教員研修や授業実践も行なった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 29 件)

- ① 山田泉、生涯学習としての日本語教育、異文化間教育、査読無、31、2010年、33-46
- ② 村上郷子、メディア・リテラシー教育と批判的(クリティカル)思考、埼玉学園大学人間学部篇紀要、査読無、9、2009年、257-268
- ③ 坂本 旬、協働学習とは何か、法政大学キ

- キャリアデザイン学会紀要生涯学習とキャリアデザイン、査読無、5、2008年、49-57
- ④ 坂本 旬、米国におけるメディア・リテラシー教育論の現段階-AMLA のメディア・リテラシー教育の中核原理を中心に-、法政大学キャリアデザイン学部紀要、査読無、5、2008年、161-200
  - ⑤ 山田 泉、外国人への「言語保障」-対等・平等な社会参加のために、言語(大修館)、査読無、4-2、2008年、76-8
  - ⑥ 村上郷子、国際理解教育をめぐる英語教育の変遷-学習指導要領および教科書を手がかりに-、埼玉学園大学紀要人間学部篇、査読無、7、2008年、205-220
  - ⑦ 坂本旬、メディア・リテラシー教育とは何か、メディア・リテラシー教育研究会報告書、査読無、2008年、1-20
  - ⑧ 坂本旬、子どもたちの発達とメディア、こども環境学研究、査読無、Vol. 4, No. 3、2008年、14-16
  - ⑨ 坂本旬、ネット時代のメディア・リテラシー教育、教育と文化、査読無、53、2008年、27-35
  - ⑩ 坂本旬、「文化探究学習」と異文化コミュニケーション、学校図書館、査読無、694、2008年、15-17
  - ⑪ 村上郷子、メディア・リテラシーの概念とその歴史的変遷、メディア・リテラシー教育研究会報告書、査読無、2008年、51-73

[学会発表] (計7件)

- ① 坂本旬、村上郷子、"Cross-Cultural Understanding and Media Literacy Education -the Practice of a Cultural Exchange Program between Cambodian and Japanese elementary schools" 2011 NAMLE (National Association for Media literacy Education、全国メディア・リテラシー協会)。 (20110723)。 Philadelphia, Pennsylvania, PA(アメリカ合衆国)
- ② 村上郷子、坂本旬、"Struggling with the obstacles : Media Literacy Education in Japan" 2009 NAMLE (National Association for Media literacy Education、全国メディア・リテラシー協会)。 (20090802)。 Detroit, MI(アメリカ合衆国)
- ③ 坂本旬、"ドキュメンタリー制作の教育的価値" 日本教育メディア学会。(20090912)。新潟大学
- ④ 坂本旬、"協働学習とは何か" 日本教育学会。(20090830)。 仏教大学
- ⑤ 坂本旬、"「NetCommons」を活用した図

- 書館司書課程教育" 私立大学情報教育協会全国大学 IT 活用教育方法研究発表会。(20070707)。アルカディア市ヶ谷
- ⑥ 坂本旬、"ICTを活用した文化探究学習の実践" 私立大学情報教育協会大学教育・情報戦略大会。(20070905)。アルカディア市ヶ谷
  - ⑦ 村上郷子、"「カルチャー・クエスト」の理論と実践" 日本教育学会。(20070830)。慶應義塾大学

[図書] (計9件)

- ① 坂本旬、村上郷子、高橋恵美子監訳『世界のメディア教育政策-ビジョン・プログラム・チャレンジャー (暫定版)』国連文明の同盟・ユネスコ・欧州委員会・グルーポ・コムニカ (原著 2009)、法政大学坂本旬研究室、213(2012)
- ② 山田泉、『生きる力をつちかう言葉 - 言語的マイノリティーが<声を持つ>ために -』大修館書店、256(2012)
- ③ 村上郷子(共著)、「女性校長をめぐる国際的傾向」、『高校の「女性」校長が少ないのはなぜか?』学文社、211(2011)
- ④ 山田泉、「多文化多言語主義と子どもの発達」田尻英三、田中宏、吉野正三、山西優二、山田泉著『外国人定住と日本語教育(増補版)』"ひつじ書房、203(2007)
- ⑤ 坂本旬(編著)、アドバンテージサーバー、『メディア・リテラシー教育の挑戦』、125(2009)
- ⑥ 山田泉を含む「外国につながる子どもたちの物語」編集委員会(6人共著, まんが: みなみななみ): "まんが クラスメイトは外国人-多文化共生 20 の物語-" 明石書店、171(2009)
- ⑦ 村上郷子(共著)、第4章「メディア・リテラシー教育の磁場」、『メディア・リテラシー教育の挑戦』、アドバンテージサーバー、125(2009)
- ⑧ 坂本旬、村上郷子、菅原真悟、高木正勝他、平成19年度科学研究費補助金(B)研究成果中間報告書: 国際文化探求学習のためのコミュニケーション・マネジメント・システムの研究(課題番号: 9300286)、法政大学(2008)
- ⑨ 坂本旬、"デジタル・キッズネット社会の子育て" 旬報社、183(2007)

[その他]

ホームページ等

<http://cq.i.hosei.ac.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂本 旬 (SAKAMOTO JUN)  
法政大学・キャリアデザイン学部・教授  
研究者番号：60287836

### (2) 研究分担者

山田 泉 (YAMADA IZUMI)  
法政大学・キャリアデザイン学部・教授  
研究者番号：30210438

村上 郷子 (MURAKAMI KYOKO)  
法政大学・キャリアデザイン学部・兼任講師  
研究者番号：80383131

### (3) 研究協力者

新井紀子：国立情報学研究所・情報社会相  
関研究系・教授

菅原真悟：国立総合研究大学院大学博士  
課程

御園生純：法政大学・キャリアデザイン学  
部・兼任講師

ノーマン・P. シャピロウ：ニューロー  
ク市立大学・学校開発センター長

シエラ・オフマン・ガーシュ：ニューロー  
ク市立大学・学校開発センター

樋口浩明：カンボジア、メコン大学・講師  
Tep Vuthy：Vocational and Developmental  
Training Organization・校長

高木勝正：墨田区立押上小学校教諭

重松栄子：江戸川区立鹿骨東小学校教諭

中村優太：江戸川区立鹿骨東小学校教諭

佐々木 順子：江戸川区立鹿骨東小学校教  
諭